

F₁ ガーベラ レボリューション・シリーズ

学名: *Gerbera jamesonii*

種子粒数の目安: 300 - 400 粒/グラム

プラグ生産ステージ

培地

水はけのよく、通気性のよいピートライトミックスなどを使用し、培地の pH は 5.5 から 6.0 の範囲

EC の適正な範囲:

ステージ 1 から 2: 0.5 から 0.7 mS/cm

ステージ 3 から 4: 0.7 から 1.0 mS/cm

播種

144 穴あるいは 288 穴サイズのトレイを使用し、1 粒播きをする。種子を確実にセルの中央に配置するよう、ディブル(土の穴あけ具)などの道具を使うことが重要である。粗めのバーミキュライトで、乾燥を防ぐため軽く覆土する。覆土は必要だが、多すぎないように注意する。覆土は十分に行うが、トレイの上側は見やすい状態を保つようにする。播種後直ちに立枯などの病気を予防するため、例えばイプロジオンなどの殺菌剤を使用する。

ステージ 1 - 播種には 4 から 7 日を要する

地 温: 20 から 21°C

光条件: オプション(あった方がよいが随意)

水 分: ステージ 1 では最適な発芽条件のために水分レベルを十分な湿潤(level 5)を維持する

湿 度: 幼根が発生するまでは、発芽チャンパーかベンチにビニールの囲いを立てて相対湿度を 95%に維持する

ステージ 2

地 温: 20 から 21°C

光条件: 26,900 ルクス(2,500 f.c.)を上限とする

水 分: 水分レベルを下げ、適度に湿潤(level 4)として根の生長を培地中で促す

湿 度: 幼根の発育が助長されるように 85 から 90%の相対湿度による管理が望ましい。ステージの終わりには 80 から 85%の湿度を下げる。湿度を急に下げると苗の揃いに影響が出るので注意する。

肥 料: 100ppm(N)、あるいはそれ以下の濃度の硝酸態肥料を与え、微量元素も添加する。EC は 0.7mS/cm 以下とする

ステージ 3

地 温: 20 から 22°C

光条件: 26,900 から 36,900 ルクス(2,500 から 3,500 f.c.)の範囲の適度なレベルを維持する

水 分: かん水の間に培地の表面が明るい茶色に乾くように、適度に乾燥(level 2)させる。level 2 から level 4 の範囲で適度な乾燥と湿潤を繰り返す

湿 度: このステージでは、相対湿度を低めに維持して、ストレスへの耐性の増進、また苗の健全な成長を促す

肥 料: 100 から 125ppm(N)の濃度の硝酸態肥料を与えて、微量元素も添加する。EC は 0.7 から 1.0mS/cm 以下とする

矮化剤(PGR): 不要である

ステージ 4

温 度: 20 から 22°C

光条件: 温度が適切に維持されている場合は、36,900 から 53,800 ルクス(3,500 から 5,000 f.c.)まで可能

水 分: ステージ 3 と同様

湿 度: ステージ 3 と同様

肥 料: 125 から 150ppm(N)の濃度の硝酸態肥料を与えて、微量元素も添加する。EC は 0.7 から 1.0mS/cm 以下とする

※ プラグ生産の段階では、(かん水において)目の細かいドリッブかミストを用いることが望ましい。また、葉の質的な変性や硬化などを防ぐ点から、15°C以下の水の使用は控える。調査の結果、プラグ生産期においては、いくぶん空腹感のある管理をした方が、移植後の苗の発育が早くなることが確認されている。苗を移植する際は、トレイに長く置き過ぎないように注意する

鉢上げから出荷まで

培地(用土)

水はけがよく、ピート主体の新しい用土を使用。培地の pH は 5.5 から 6.0 の範囲、また初期養分は中庸とする

コンテナサイズ

マイクロ レポリキュレーション	7 から 9cm
ミニ レポリキュレーション	9 から 10cm
ミディ レポリキュレーション	10 から 11cm
スタンダード レポリキュレーション	10.5 から 13cm
メガ レポリキュレーション	14cm 以上

鉢上げ(ポッティング)

各生産ステージにおける株揃いが高いシリーズであり、鉢上げ後の生育も良く揃います。用土をポットいっぱい満たして、嵩(かさ)を揃えます。用土を詰めたら圧縮はせず、ディブルなどの道具を使ってポットの中央にプラグ用の穴を作ります。均等なグレードの苗を移植し、用土(培地)の表面上に約6mm出るような深さで整えます。軽く水をかけた後、苗は徐々にしっかりと安定します。水をかけた後は、用土の表面と株の冠部(クラウン)の高さが同じになります。深植えをすると冠部が病気にかかりやすくなるので注意しましょう

温度

昼間温度: 19 から 20℃

夜間温度: 17 から 19℃

29℃を超える温度条件は品質に悪影響が現れるので、十分に注意しましょう

移植後の 2 週間は、夜温 18℃の条件が根の生育を助長します。その後は 15℃の低温にもよく耐えます。曇りがちな条件が続く場合は、昼間と夜間の温度差を利用したマイナス DIF(ネガティブ DIF)によって、軸の伸長を抑えることが可能です

照度

ガーベラは高いレベルの光条件を好む植物です

移植後は、40,000 から 60,000 ルクス(4,000 から 6,000 f.c.)の範囲で管理します。苗が育ち成熟するにしたがって高いレベルの照度にも適応するようになります。70,000 ルクス(7,000 f.c.)を超える条件では遮光が必要です

かん水

ガーベラは基本的には適度な水分、あるいはやや乾燥した状態を好みます。これは、たとえ移植の直後であっても適度な量でも差し支えありません。かん水時の管理として、次に水を与えるまではややおれるくらいの状態にします。過湿はいかなる時も、株の質を低下させ、また歩留の低下につながるということを覚えておきましょう。花芽がつくまでは頭上かん水も可能ですが、やはりポットへのかん水または底面給水の方が良いでしょう。ドリップチューブの利用も可能です

肥料

次ページの表中のガイドラインを参照

PGR(矮化剤)

矮化剤は不要な伸長を抑制するために使用します。B ナイン(有効成分: ダミノジッド)を 1,000 から 2,500ppm の濃度で、10 日前後の間隔をおいて 1、2 回散布します。花芽の大きさが豆粒大かそれよりも大きくなってからは、花の大きさに影響が現れたり、また開花が遅れる要因にもなるので、矮化剤処理の使用はやめましょう

ピンチ

ピンチは不要

スペーシング

ポットやコンテナのサイズにもよりますが、移植後 4、6 週をめぐり、かなりの株と葉どうしが接触するようになったら、適宜間隔をとる

平均的な生産期間

播種から移植まで(144 穴から 288 穴トレイ): 6 から 7 週

移植から株ができるまで: 4 から 6 週

仕上げ、育成期間: 4 から 6 週

※ 生産に要する期間は播種日や光条件、また使用するポットやコンテナの大きさなどによって変わってきます。播種から仕上がりまでの目途として、50%の個体が開花するまでは概ね 14、15 週です。100%に達するのはさらに 10 から 14 日ほど要します

病例等

害虫: とくにスリップスには注意して、定期的に殺虫駆除を行う。またホワイトフライやショーフライ、ハモグリ、ハダニ、ホコリダニなどに注意する

病気: 通気の良い環境を整備することがきわめて重要である。ウドンコ病にかかりやすいので注意する。温度と湿度が上昇するとバト病が発生しやすくなる。他にも冠部の病気やボトリティス、フザリウムなどにも注意が必要である

開花後の管理

花を保護する点からもスリーブで覆うことが適当です。その場合は、ビニールではなく紙やポリプロピレン製がよいでしょう

肥料

ガーベラは、どちらかというとあまり肥料を多く必要としない植物です。施肥の頻度は光と温度の条件に依拠します。光が弱く短日に向かう条件では施肥を抑え、逆に光が強く長日に向かう場合は肥料を多く与えます

週に一度は、または必要に応じて、EC が 1.5mmhos/cm を超えないように真水で水洗しましょう

過度なアンモニア態窒素は避けましょう。この場合、栄養成長に傾きすぎて花芽数の減少が懸念されます。また極端にアンモニア態が増えると、根が焼けたり、株全体の質の低下や歩留の低下につながります

2,3 週に一度、硫酸マグネシウム(MgSO₄)を 1 ポンド(約 450 グラム)、Fe EDDHA(キレート鉄を含む鉄分の修正剤)を 1 オンス(約 28 グラム)を含む 100 ガロン(約 380 リットル)の水溶液を投与する。目安としては硫酸マグネシウムが 1%、キレート鉄が 0.05%の水溶液

pH の範囲: 5.6 から 6.2

フーティライザー・チャート(標準的な施肥の指標)

対照となる 生産ステージ	N (窒素)	P (リン)	K (カリウム)	Ca (カルシウム)	MgSO ₄ (硫酸マグネシウム)	微量元素	EC
プラグ育苗 (6 から 7 週)	各ステージ に示された 濃度を参照	25-75 ppm	50-100 ppm	50 ppm	25 ppm *	***	各ステージに 示された 濃度を参照
移植時 **	150 ppm	25 ppm	100 ppm	50 ppm	25 ppm *	***	1.2-1.5
花芽の分化、またス ペーシングをとった 時は開花するまで ****	75 ppm	25 ppm	150 ppm	75 ppm	25 ppm *	***	1.2-1.5

*: マグネシウムの供給源として硫酸マグネシウム(MgSO₄)を用いる

** : 苗を移植した後は、17-5-17 あるいは 14-4-14 の汎用タイプのブレンド肥料を用いる

***: 生産サイクルの間は微量栄養素を最小限で維持する。

****: スペーシングからそして花芽分化が進行している間は 13-10-23、あるいは類似のブレンド肥料を用いる
底面給水で生産する場合は EC を 1.6 から 2.6 の範囲で管理し、栄養素のレベルは適宜調整する

注意点:

- 同品種を生産するにあたって、ここで示されている栽培情報は基本的な参考資料としてご利用ください。生産された植物は、気候条件や地理的な緯・経度、また作型の時期、ハウスの環境によって結果が異なることがあります
- 殺虫・殺菌剤、また矮化剤の使用についての記載はあくまでもガイドラインであり、必ず使用方法を十分にまた正しく読み、使用者の自らの責任のもとでそれに則った正しい使用方法とるようにしましょう

注意点: EC 値(電気伝導度)は、ピート主体のオランダの用土を算出の基準としているので、土を用いた配合では適合し得ない場合があります。